・・・コラム・・・

昔は、田植えは重労働だった。

舟形の容器に苗を入れ、それを押しながら３本の直線を植えて行く。

家族で、１日に、ようやく１～２反植えながら１０日以上も続くのだ。

「田植えの機械ができれば、いいのにな・・・」と、ぽつりと言った母の姿は、今でも鮮明に覚えている。

早く終わらすために、出面を雇うことになる。村には、田んぼを持っていない人やわずかの田んぼしかない人もいた。そんな人たちを雇うのだ。

おやつにはキャラメルを配っていた。そのキャラメルにはおまけがついていた。おまけを抜き取ってから、配ったことを覚えている。今のように、個別包装されていないので、簡単にあけられた。

５月下旬頃、ようやく田植えが終わる。すると、待ちに待った小学校の運動会である。全校児童７０名程の複式学級であったので、演技が何回もあった。

当日は、校庭一杯に村人がすべて集まってきた。出店も、多数あった。お昼は、お弁当を持ってきて、家族で賑やかに食べたのだった。

田んぼの苗がグングン成長し緑色が広がり始めると、山菜採りに夢中になった。貴重な食料であり、美味しいおかずでもあった。フキ・ワラビ・ウド・コゴミ・オオバギボウシ・タラの芽が目当てだ。

フキは、子どもの背丈ほどの物がたくさんあった。まさに、コロポックルのフキである。突然雨が降り出したときには、フキの大きな葉を傘がわりにしたことを思い出す。

ムシロの上に山と積まれたフキを、大鍋でゆでてから皮をむく。それでも手はアクで茶黒くなってしまうのだ。皮をむいたフキはムシロに並べ、天日干しにする。細い茎のように干し上がると、屋根裏に保存しておく。野菜の少ない冬の時期の食料である。母が煮てくれたフキは、おいしかった！。だしはいりこだけで他は何も入っていなかったが、ご飯の唯一のおかずで、もりもり食べた。ワラビもたくさん採ってきた。裏山へ行くと、すぐに両手一杯になった。

ふり返ってみると、春は田も山も生き生きしていて美しかった。そして、私の胃袋は山菜で満たされていた。

満月が照らしてくれた幸せなひととき

・・・稲刈りの思い出・・・　　古高　利男

今は昔、私の６０年前の稲刈りの思い出です。

９月中旬から、稲刈りがはじまりました。やがて、学校が１週間休みになり、家族総出の稲刈りとなるのでした。

私は、見よう見まねで稲を刈っていきます。大人サイズの鎌を持ち、３株刈ると右側の長靴の上に置き、また３株刈ると、今度はハの字に置きます。そして、藁で縛るのです。母から「ぐるっと回して、下に押し込むンじゃ」と言われますが、なかなか思うようにはいきません。が、そのうち慣れてくると、なんとかきつく縛ることができました。その一束を、穂のほうに手を入れて、円をえがくようにします。その一束が、きちんと立ちます。その回りに、刈った稲束を並べていくのです。６束並べると一ボッチで、次のボッチが始まります。これを、朝から夕方まで、雨の日も、家族で続けるのです。１日に、１～２反のスピードで、１０月いっぱいかかりました。

子どもの私にとって、この手伝いは辛く嫌なこととは感じませんでした。太陽の心地よい暖かさ、黒い土が増えて来ることの励み、そして、土の割れ目にクモ・バッタが飛び出してくる様子を興味を持って見ていました。午後の休憩には、畑で採れた大きなスイカを食べながら、父母の会話をなんとなく聞いていました。

わたしは、家族揃って作業していることに、心地よさを感じていました。

今日は、お月様が出ています。夕食後、また、田んぼに足を向けました。今度は、月明かりを頼りに、はさかけをするのです。

明かりは満月です。その時、旭岳のある東の空から、子ども心にも大きな満月だったことを今で鮮明に覚えています。満月の中ではウサギが餅をついていました。

その月明かりを頼りに、はさのそばに稲束を運ぶのが私の役目です。生乾きと稲穂の重みでひとボッチを運ぶのがやっとでした。父と母は、それをどんどんはさに掛けていきます。はさは一間ごとに支柱が立っています。その間に稲束を２０ほど詰めていきます。きつく詰めても、だんだん乾燥してくるので隙間が出てきます。高さ３メートルの間に、藁縄が６本ぐらい張られています。どんどん稲束を掛けていきますから、高い所は梯子を使い、上にいる父に母が投げて渡していました。

月明かりで影ができるような中、家族総出の田んぼ仕事は、私にとって「辛くて嫌なこと」ではなく「なんとなく充実感」を味わっていたような気がします。父母がいっしょにいることで、闇は怖くありませんでした。

稲の塵で痒くなった体を湯船に沈めていると、どんどん眠気や疲れが遠ざかっていくような気持ちになりました。

秋の収穫時期は、空気が明るく澄んでいるような感じでした。脱穀し、籾すり機にかけ、白いお米が流れるように出てくる光景は、家族の動きを軽快にしました。俵に詰めた６０kgのお米は、当時約４０００円です。我が家にとって、それが１年間の収入のすべてでした。

家族にとって「この頃が一番幸せだったのではないか？」と思い出すのです。

父は８９才で、母は９６才で、生涯を終えました。

・・・コラム・・・

クズは多才？

「ちょっと、寒気がするな？」と感じたら、すぐに葛根湯を飲む。この葛根湯の生薬がクズであるから意外である。

荒れ地や耕作放棄地に気まま自由に蔓を延ばす、悪名高きクズだ。砂漠の緑化にと種を持って行ったアメリカで、今では悪しき外来植物の一つだという。

蔓だから、当然利用できるはずだ。

蔓を採取してきて、篭作りに挑戦してみた。長いので、採るのも編むのも大変だった。コツを飲み込めないと、安く便利なものがたくさんあるので、すぐにギブアップしたくなる。

なんとか編み終え、植木鉢を置いてみると、なかなかいい感じである。

クズは古来から重要な植物だった。

○葉・・・牛馬のエサ

○茎・・・クズ布
　　行李
　　篭
　　垣根

○根・・・生薬の葛根（解熱薬）
　　クズ粉　（奈良県吉野郡國栖（くず）でとれたものが有名）
　　・ クズまんじゅう
　　・ クズ餅
　　以前、高山市へ遊びにいったとき、小さな店に入った。メニューに「くず餅」があった。こういう土地柄だから本物だろうと予感がした。案の定、本物で、半透明でしっとりと粘りがあり、非常に美味だった。
　　・ クズ湯
　　・ クズようかん
　　クズ粉のためのデンプンは、蔓の根元が肥大しているものを掘る。重労働だ。冬にデンプンがたくさんたまっているというが・・・。

○花・・・秋の七草の一つ
　　日本三大名山の一つ白山に登るときだった。白山温泉で宿泊したとき、山菜の天ぷらにクズの花が出てきた。あの大柄な花だ。女将は、「おいしいですよ」といったが、「食べられないことはない」という感想だった。

・・・コラム・・・

「冬には、白い雪が降るものだ」という認識があった。
上京すると、お正月には雪が無い。「秋が続くんだ」という思いだった。
時々首都圏にも雪が降った。そんな時は、気分が高揚した。

私の生まれは、北海道旭川市の東、旭岳の麓の東川町だ。町の中心から北東に向かい、石狩川の支流である倉沼川の上流にある。山と山に挟まれた平坦地に４０ぐらいの家族が農業を営んでいた。

回りが田んぼと山なので、冬は一面真っ白、どこでもゲレンデになった。楽しみはスキーしかない。

当時のスキーはカンダハーとよばれる長靴を固定するものだった。かかとが自由に上がり、歩き易い。今でいうクロスカントリースキーである。

田んぼを横切り、小川を渡り、山の斜面にたどり着く。ここまででも十分な準備運動だ。身体がほてってくる。これから斜面を登るのだ。階段登行したりハの字で登ったりしながら、やっと高いところまで着いたときには汗をかき、暖かくくてしょうがなかった。

しばし休憩である。眺めると、ポツンポツンとある家は雪をいっぱい被りながら白い煙が上っている。その向こうには山が連なっている。一番奥に、北海道で一番高い旭岳（２２９１メートル）が鎮座しているのだ。この光景を何度も見続けてきた。当たり前の風景だった。

滑り降りるのに、なかなか決心がつかない。滑り降りると、またこの斜面を登ってこなくてはならないからだ。２本も滑れば、もう十分だった。

喉の渇きは雪で潤す。木にからみついている葡萄を探し、シャーベット状の葡萄を食べる。これはうまい！甘酸っぱく、果汁がたっぷり入っている。ウサギの糞と足跡を身ながら、小川に垂れているツララをストックで壊し、田んぼの真ん中で大の字に寝てほってった体を冷やし、空腹を覚えながら家路につくのだった。

母が編んでくれた太い毛糸の下着とセーターが、唯一の防寒着だった。

２００９年から、のらえもんのスキーが始まった。初めての時は、リフトを使える人はわずかだった。が、毎年繰り返している間にみんな上手に滑れるようになってきた。１年に１回のスキーでも、確実に上手になるのだ。子育てで、しばらくブランクのあった人も参加するようになり、ゆったりとした楽しいスキーになってきている。

１年に１回ののらえもんスキーだが、私にとっては「毎年冬がやってくる」ことになった。それが１２回も続いた。ありがたいことだ。